

令和4年度 第4回 藤沢市立善行学校 学校運営協議会会議録

開催日時 2022年9月13日（火）10時～11時30分  
場 所 善行中学校 図書室

出席委員	<p>亀谷 亀雄（会長・善行地区自治会連合会副会長） 高森 保明（副会長・校長） 植木 春雄（善行地区自治会連合会会長） 齊藤 正枝（善行三者ふれあいネットワーク会長・善行地区青少年育成協力会会長） 木村 徹（善行市民センター センター長・善行公民館 館長） 松本 美由紀（社会福祉協議会（CSW）） 諏訪 理恵（善行中学校PTA会長） 人見 甲子郎（NPO 法人森の仔じゅうがっこう事務局長） 山田 大（教頭） 高塚 朝未（生徒支援担当教諭）</p>
次第	<p>1. 学校運営や生徒を取り巻く現状、課題についての協議</p>
協議内容	<p>&lt;会長&gt; 前回の会議では、不登校について多くの時間を割いて協議しました。しかし、取り扱いの繊細な内容から解決に向けた方策や各関係機関の連携といった具体策まで協議を深めることができなかつたため、今回、引き続き協議の議題とします。校長からもう一度、現状や課題を整理して説明をお願いします。</p> <p>&lt;校長&gt; 夏休み前に新型コロナウイルス感染症の陽性者が急増したことにより、学級閉鎖や日程変更などの対応を行った。お盆を過ぎて感染状況が落ち着き、8月31日から登校再開したが、スムーズに学校生活・期末試験を実施できている。学校便りに紹介したとおり、夏の市総体・湘南ブロック大会で活躍が見られた。文化発表会においては保護者の方に校内の展示物の見学いただくよう予定している。不登校の問題については、個々の抱える課題や家庭環境等に違いがあり、一律に有効な手だけを探ることはできない、学校としては「自己肯定感」を高めることを重視して取り組んでいきたい。日本は諸外国と比べ自己肯定感が低いという統計データもあり、本校でも同様の傾向があると捉えている。学校という環境は同年代の生徒だけでの活動に限定されてしまうため、世代を超えた活動・交流を通して自己肯定感を高め、それぞれの資質・能力を伸ばしていくことを期待している。学校と地域が連携し、情報が共有されることによって、より多面的に生徒の自己肯定感を高めていくことが、ひいては不登校の改善にもつながると考えている。</p> <p>&lt;会長&gt; ただいまの校長の提言を受けて、何かご意見を頂戴したいと考えますが、発言をお願いします。</p>

<植木委員>

地域で、体調を崩し歩けなくなった方を通りかかった本校中学生が、付き添い自宅まで送っていった、という報告を受け、とてもよいエピソードだと感じた。

前回、中学生の挨拶がよくできているというお話があったが、挨拶については、中学生も小学生も声が出ない生徒が多いと感じる。元気な挨拶を返してほしいと思うが、あまり要求すると苦情を言う保護者もあり難しい部分もある。自分自身が認知されていないということも原因と考えるが、朝の気持ちのいい挨拶をこの地域に広めていきたい。アメリカでは意外と顔見知りでない人にも大きな声で挨拶を交わされていた。

<齋藤委員>

前回までの協議の感想として、不登校など個々の課題が違うため、まとめて対策というのは難しい。義務教育ではあるが、学校に通うべきという原則よりも、外に一步踏み出す興味を高めるなど心を元気にすることが大切では。3行詩の活動を行っているが、不登校の子にも一行でいいので、気持ちを表現してもらう活動もやってみたい。不登校の生徒にも地域で楽しい活動があることを伝えていきたい。

コロナにより中止していた取り組みを3年ぶりに再開している。高齢者とふれあう活動や中学生が小学生を教える活動などもあるので、地域が子どもを育てる場を提供していきたい。

<会長>

不登校の生徒を直接支援する方策を考える一方で、その背景や原因についても我々が理解すべき時と考える。

<人見委員>

挨拶についてのご意見がありました。まずは大人が挨拶すべき、大人の方が挨拶できていないと感じる。

まとめて解決するのは難しいというご指摘について、勤勉性を獲得するのが小中学生の年代の特徴である。地域で育てる役割・活躍・褒める（承認）という、青少協の活動をコロナに負けずに推進してほしい。

<会長>

皆様のご発言から、やはり、地域で子どもを育てるという視点は非常に大切であると再認識できました。

その一つとして、自治連の植木委員が進めている、日中、地域に残っている中学生を災害時の共助人材として活躍してもらう活動についてご説明ください。

<植木委員>

日中は、大人は仕事、大学生・高校生は他地域の学校へ出かけており、高齢者や小さな子どもを支える人材として、中学生は大いに頼りにしている。中学生が活躍する防災訓練を通して、実際の災害に備えていきたい。学校の協力をお願いしたい。今後、学校と具体的な内容を進めて生きたい。

<会長>

青少協の活動も防災訓練も、中学生が役割を担い、活躍できる場を提供している。市民センターから何か情報提供はありますか。

<木村委員>

市民センターから「出張こども食堂」の紹介。24時間テレビの企画で寄贈されたトラックでNPO法人が長後地域から「出張こども食堂」を善行に出店する。配膳等の準備はNPOが行うが、そこに中学生がお手伝いすることによって、交

流・活躍の場が広がるのでは？

<諏訪委員>

以前、防災訓練において保護者向けの普通救命講習を開催しており、中学生もそういった機会があればよいと考えます。

こども食堂のチラシは今日初めて目にしたが、学校を通して配布することでもっと認知度が上がるのではと思う。

善行キッズという催しに、こどもが小学生の時に参加した。中学生にもそうした活動に参加できれば、自己肯定感を高め、不登校の解消につながるきっかけになると期待している。今後、中学生が参加できるボランティアが増えてほしい。

<高塚委員>

中学生の夏休みの過ごし方を聞いていると、花火大会や浴衣で出かけることなど、非日常の体験がとても心に残っていることがうかがえる。

不登校については、地域で様々な取り組みが行われていることは大変ありがたいと思う。

挨拶については、大人の問題というご意見にはハッとさせられた。まず教職員が率先して元気に爽やかな挨拶を心がけなくてはと感じた。

<会長>

これまで、不登校について多くの時間を割いて協議してきましたが、学校にはそれ以外にも様々な課題があるが、何かちがう話題はありますか。

<人見委員>

自己肯定感を高めるために気になるのは、学校評価の教職員の結果から、まず生徒を支える先生自身の活力や心のゆとりがないのではと心配している。

善行中学校の先生方を支える取り組みはできないものか？先生方の心の内を吐き出す場が必要なのでは？そこに本協議会がお手伝いできないか。

<校長>

教師の自己肯定感は、授業において生徒とのふれあいを通して培われる部分が大きい。やる気に満ちて、時間を惜しまず教材研究や部活動に打ち込む教員ほど休みがなく疲弊していくという側面もある。

負担軽減を図るため、様々なスタッフを導入している。スクールサポートスタッフや介助員、学習支援員など。高塚委員は今年の夏休みは、ゆっくり休めましたか？

<高塚委員>

体調を崩したこともあり、例年より多く休むことができたが、夏休みがなければ一年間乗り切れないと感じています。苦しい気持ちを十分に吐き出せていないという実感もあります。

<人見委員>

そういう悩みや教員自身の課題を話す機会はあるのか？ないのであれば、積極的にそういう機会を設けて改善を図るべきではないのか？

<松本委員>

職場に戻って、会議録を回覧すると「先生たち大丈夫？」という感想がでた。職員の負担は心配ではあるが、教員の元気を回復させることは重要である。

こどもを変えるためには、親も巻き込んでという考え方もある。鶴沼中では授業の一環として、地域と一緒に炊き出しをするという取り組みもある。

CSWの活動として、チラシの作成にも地域の人材がそれぞれの得意な技能を

活かしている。中学生にもそのような視点で活躍の場を与えられるとよい。

<会長>

前回、人見委員から提案のあった、地域で不登校相談会などを開催することや我々の勉強会などを行うことも一つの方策であると考えますが。

<諏訪委員>

それぞれ背景や思い、学校との関係性もちがうため、そこに当事者が参加することで問題の解決が図れるとは思えない。しかし、不登校の生徒が学校に行けないことに理解のない保護者もいるので、委員の理解を深める勉強会は有効と考える。

<人見委員>

我々、協議会委員の勉強会の開催は可能。それを踏まえて、今後の不登校対策について協議を深めることは有効である。

勉強会を行うにしても、「こどもの話を聞いてあげる」というスタンスでは、こどもは話をしてくれない。私はいつでも「聞かせてもらおう」というスタンスで臨み、そうすることで、少しでもこどもが話してみようという気になってくれる。

<会長>

それでは、不登校に関する勉強会を開催する方向で調整します。開催日時等は後日お知らせします。

<人見委員>

委員の都合を合わせるのが難しいので、開催日時は協議会と同日開催が望ましいと考えます。

次回開催日程 2022年 11月29日(火) 10時～  
場所 善行中学校 会議室